

教科・領域等 〔国語〕

11 「対話的な学び」を視点とした授業改善の実践

**こんな実践**

相手を意識して、根拠を明確にしながら文章の構成や表現を工夫して書くために文章を推敲する際の視点を共有したことで、子供が考えを支えている理由や背景に目を向けていった実践です。

実践学校 S 中学校

実践学年 1 学年

実践時期 10 月中旬

単元名 「自分の気に入った絵画作品の鑑賞文を書こう」

学習指導要領との関連 : B 書くこと (1) ウ, エ, オ

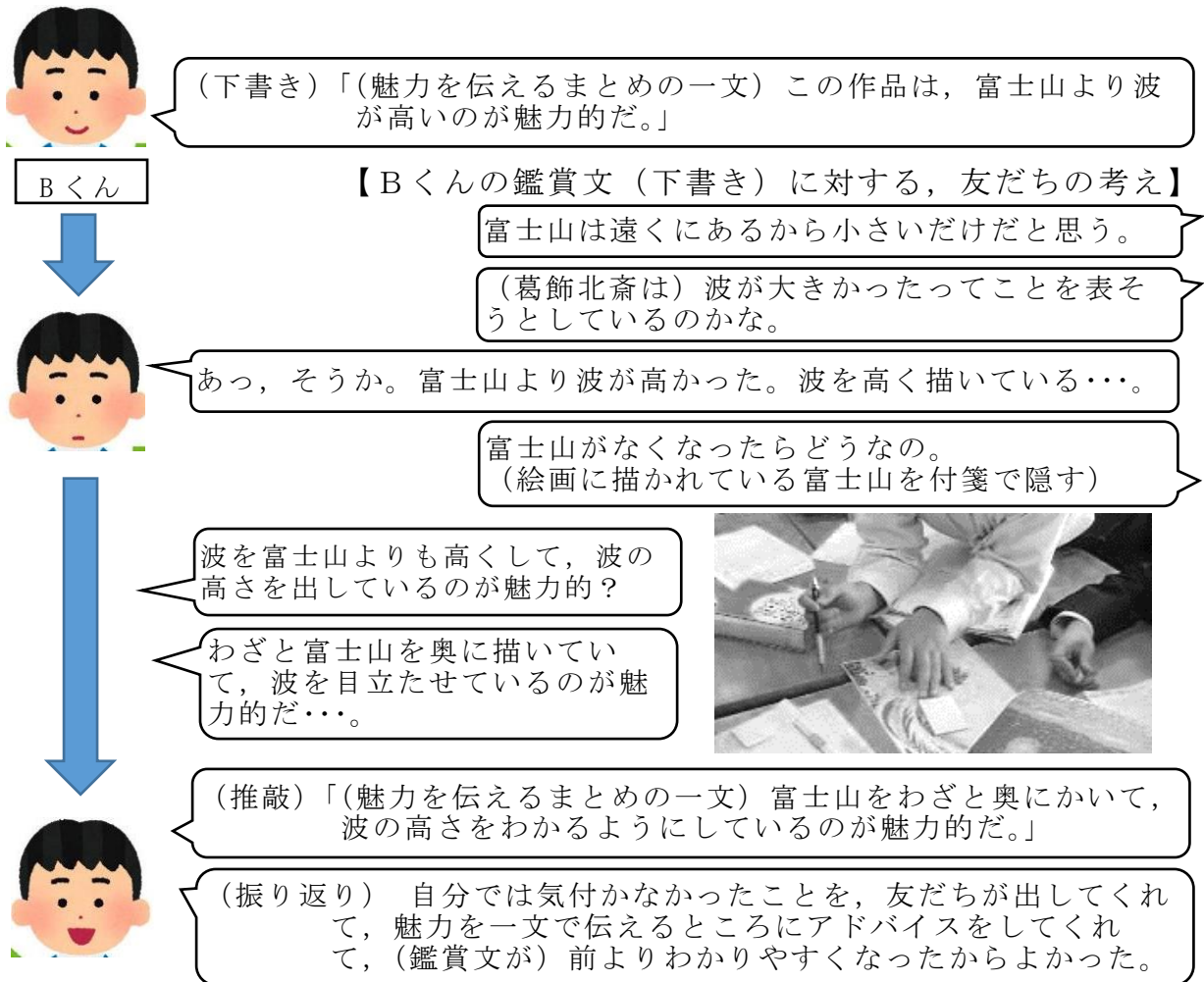
本単元の構想 (数字は時数)

- 1 : 鑑賞文のイメージをつかむ。
- 2 : 作品の具体的な特徴と自分が感じたことを付箋に書く。
- 3 : 前時で書いた付箋を基に鑑賞文の構成メモを作る。
- 4 : 構成メモから鑑賞文の下書きを書く。
- 5 : 下書きを読み合い、推敲する。【本時】
- 6 : 清書した鑑賞文を読み合い、根拠の明確さや表現の工夫の良さを伝え合う。

○ A 先生は単元を構想する際、生徒が根拠を明確にしながら文章の構成や表現の仕方を工夫できることを目指しました。そこで、導入の段階で、根拠にした部分を付箋に書いて整理する場面を位置付けたり、展開の中で、絵画作品を鑑賞する観点が根拠に結びつくことを確認して、鑑賞文のモデル文

の工夫を共有する場面を位置付けたりしました。B くんは、手前に大きく波が描かれ、その背景に富士山が小さく描かれている『神奈川沖浪裏』（葛飾北斎）を選び、自分が感じた魅力を鑑賞文にしていきました。A 先生は、子供が相手を意識して鑑賞文を推敲するための観点を子供に投げかけました。子供からの「根拠がしっかりしていないと魅力が伝わらない」や「魅力がきちんと伝わったのか聞いてみたい」という声を基に観点を整理して全体で共有しました。その中から「魅力が読み手に伝わるように根拠が明確になっているか」という観点を踏まえ、互いの下書きを読み、助言し合う場面を位置付けました。

- 第5時の授業です。B くんは、「富士山より波が高いのが魅力的だ」ということを伝える鑑賞文の下書きをしました。



- Bくんは、今の自分の表現のままでは、作品の魅力が友達に伝わりにくいということを感じました。そして友達「波が大きかったってことを表そうとしているのかな」という言葉から、作品に込められた作者の意図に思いをはせ、自分が感じた魅力が、作者によって意図されたものだったことに気付き、魅力を伝えるまとめの一文を推敲していきました。



ここがポイント

- ・ 子供の声を基に推敲の観点を学級内で共有し話し合い活動につなげることで、自分の推敲の根拠を吟味し、新たな気付きにつなげる機会を設けることが大切です。

まとめ

- ・ 相手や目的を明確にして文章を書き、友達の声をつきかけに、魅力を紹介する作品に込められた作者の意図も踏まえて、文章を推敲していった姿は、読み手の立場に立って、叙述の仕方などを確かめて文章を整えるという資質・能力につながっていくと思われます。